

日本ロマンス語学会
第 47 回大会
研究発表要旨

(2009 年 5 月 30 日・31 日北海道大学札幌キャンパスにて開催)

統一テーマ：ロマンス語における疑問文

【統一テーマ ①】「ルーマニア語の疑問文」

倍賞 和子

ルーマニア語の文法書で疑問文に殆ど触れてないことに驚かされる。英語の学習を始めて最初に到達した複雑さが疑問文の法則であった私にとって、ルーマニア語の疑問文の法則の簡素さには却って戸惑うほどである。基本的に、イントネーションと語彙的な問題として片付けることができる。しかし統語的な問題が全くないわけではない。疑問詞のある疑問文では疑問詞を文頭に置くのが普通である。それにより、他の部分が叙述文と多少異なってくるのは当然である。動詞の目的語（与格、対格とも）が代名詞である場合を除き、語順が比較的自由であるルーマニア語であるが、疑問文と叙述文の「より自然な語順」にどのような違いが見られるかについて、古語や方言にみられる主語と動詞の倒置と併せて纏めてみたい。

【統一テーマ ②】「古イタリア語の疑問文の構造」

鈴木 信五

主節で表される直接疑問文に絞って考えると、古イタリア語（13世紀～14世紀初頭のフィレンツェ方言）では、*si/no* による答えを求める全体疑問文においても、疑問詞に対応する要素を答えとして求める部分疑問文においても、主語が表現される場合は、これが名詞であれ代名詞であれ、定動詞のすぐ後に続くという点で共通している。さらに、部分疑問文においては、定動詞の前に疑問詞を含む句が現れる。ところで、古イタリア語の平叙文による主節では、定動詞の前に置かれた要素は（それが主語であれ、それ以外の要素であれ）テーマからフォーカスに至るまでさまざまな情報上の価値をもつことができる。一方、定動詞のすぐ後に残された主語は、テキスト中で息の長いテーマを引き継ぐという役割を果たす（S. Suzuki: “Between thematicity and grammaticalisation”, in L. Mereu (ed.), *Information structure and its interfaces*, Berlin, Mouton de Gruyter, 2009）。今回の報告では、この平叙文に関する視点を発展させて、古イタリア語の疑問文が平叙文と共有する統語構造上、情報構造上の特徴を探っていく。

【統一テーマ ③】「疑問文と従属節の境目：フリウリ語のケース」

山本 真司

フリウリ語における、疑問詞を用いた疑問文とそれに関連するさまざまな従属節との関係について、現地での調査を踏まえて、従来、辞書や文法書では明確に述べられていなかった幾つかの現象を、記述・報告する。

多くの言語におけると同じく、ロマンス諸語においても（というか実はラテン語の時点から）疑問詞と、それと関連した（しばしば音声的に同形の）従属節導入辞との関連は明らかで、しばしば注目されてきた。例えば、イタリア語 *quando* 「いつ / ...する時」のように。

ちなみに、これらの導入辞が形成する独立の疑問文と従属節との間の関連を理解するための便法として、疑問文と別の文とのあいだの一種の融合のプロセスを想定する説明があるが、今回はこのような説明がどの程度まで共時的・通時的現実に合致したものかについては追求しない。とは言えそこに暗示されている、疑問文と従属節との間の関連性・連続性は興味深い問題である。

これらの導入辞は、伝統的な文法では、時に「接続詞」、時に「関係詞」（関係代名詞、関係副詞、など）などと呼ばれて、必ずしも統一的な扱いは受けてこなかった。実際、これらの導入辞の間には、（疑問文と従属節との間の関連性という問題に関して）並行した振る舞いが観察され、統一的な扱いが可能であるように見える一方、異なった点も少なくない。

フリウリ語の場合、イタリア語とは異なり、疑問文と従属節とは、動詞の疑問形と平叙形の区別 (*al cjante* 「彼は歌う」～ *cjantial* 「彼は歌うか?」)、従属節を特徴付ける導入辞の二重使用 (*cuant vegnial* 「彼はいつ来るのか」～ *cuant che al ven* 「彼が来るとき」)、また時には明確な語彙的相違 (*Dulà sestu?* 「君はどこにいるのか?」～ *Reste là che tu sês* 「今いる場所にとどまりなさい」) などによって、明確に隔てられているように見える。しかし、時には、1つの領域に2つの導入辞が「相互乗り入れ」していて (*Disimi dulà / là che tu sês* 「君がどこに住んでいるのか教えてくれ」)、疑問文と従属節との間の密接な関係を窺わせる。

【統一テーマ ④】「歴史言語類型論的視点から見たフランス語の疑問文」

今田 良信

総合討議に資するため、古フランス語および現代フランス語の疑問文の作り方（ただし、古フランス語の抑揚など音声的側面については不明の部分がありはするが）を概観した上で、「歴史言語類型論」（これは筆者の造語であり、発表で若干ご説明したい）的視点から見て、この両者の間に変化の跡が見られるのか見られないのか、また、見られるとすれば、それはどのような変化の傾向であるかを考えてみる予定である。

【統一テーマ ⑤】「ポルトガル語の疑問文」

黒沢 直俊

ポルトガル語の文法書などで疑問文の基本的な構造に関し触れられることはほとんどない。構造そのものが比較的単純で、疑問文に関係する形態的要素が少ないためであろう。実際、ポルトガル語の学習において疑問文が深刻な問題となることはあまりないように思われる。ただ、語順に関しては、ブラジルとポルトガルで異なっている部分があるので、しばしば初級の学習者に混乱を起こす。

現在までの研究で、疑問文の基本的構造を包括的に扱っているのは2003年にポルトガルで出版された Maria Helena Mira Mateus らによる *Gramática da Língua Portuguesa, 5.ª edição* (Editorial Caminho: Lisboa) くらいであろうと思う。本発表では、同書に踏まえながら、ポルトガル語の疑問文の基本的構造を大まかに提示し、さらに最近手に入りやすくなっている口語コーパスや中世語コーパスなどからの用例をまじえ、総合討議に話題を提供しようとするものである。

自由テーマ

【自由テーマ ①】「日本人学習者によるイタリア語の冠詞と名詞の習得に関する考察」

齊藤 智栄子

本発表では、授業で観察される冠詞と名詞の習得上の問題を、具体的な実験結果を通して考察する。

実験対象は、大学の伊語初履修の A 組と B 組で、共通の名詞群と冠詞を A 組へは性別に、B 組へは数別に教えた。両組とも次の授業で小テストを行ない、期末試験も含め平均点と U 検定で比較した。その結果、小テスト・期末とも A 組の平均点が B 組よりも高かった。また、小テストの女性不定冠詞と定冠詞単数、期末の全冠詞で A 組に統計的有為差が確認された ($P < .05$)。

この実験結果を検討すると、冠詞と名詞を性別に教えた場合には学生は冠詞から習得し、数別に教えた場合には名詞から習得する傾向が見られ、習得上見られる混乱は表現形式に絞られることが分かる。

従って、本発表では授業において名詞と冠詞、性と数を個別に提示して教授する方法を提案する。具体的には、形式が簡略な女性から、女性単数名詞→冠詞、男性単数名詞→冠詞、女性複数名詞→冠詞、男性複数名詞→冠詞、の順に展開するのが効果的であると考えられる。

【自由テーマ ②】「フランコプロヴァンサル語における開音節母音 A の変化に関する一考察」

新井 隆司

フランコプロヴァンサル語において、ラテン語の開音節母音 A は先行する子音の特性によって異なった変化を遂げる。すなわち非口蓋子音に先行されるアクセントのある開音節母音 A は /a/ のまま維持されるか、/o/ または /e/ などに変化し、口蓋子音に先行される A は口蓋化し、/ie/、/je/、/ja/、/i/、/e/ などと変化する。

本発表では主にデュラフル A. Duraffour の *Glossaire des patois francoprovençaux* (1969) を用いて、フランコプロヴァンサル語領域においてアクセントのある開音節母音 A の変化に地域的な統一性があるのか、またそれぞれの条件のもとでの音韻変化に規則性が見られるかについて分析することを目的とする。

【自由テーマ ③】「フランス語の意見・認知を表す動詞の疑問文における叙法の選択基準」

井上 大輔

フランス語の意見・認知を表す動詞は、肯定文では直説法が使われるのに対し、疑問文では直説法と接続法の両方が使用可能になることが多い。なぜこのようなことが起こるのだろうか？本発表の目的は、疑問文における叙法の選択基準を、話者の視点という観点から説明することにある。そのためにも、同様の現象が観察されるイタリア語及びスペイン語における意見・認知を表す動詞の疑問文と比較を行った後で、コーパスから集めた実例を使ってフランス語の叙法の選択基準について検討を行う。

【自由テーマ ④】「ポルトガル語の直説法未来と過去未来における非直説法性について」

鳥越 慎太郎

本研究では、ポルトガル語の直説法未来と直説法過去未来の意味的な非直説法性を考察する。スペイン語で対応する時制形式について、それらを推定法 (Presumptive Mood) という用語を用いて非直説法叙法としての体系化を試みた出口厚実 (1980、1986) の研究に踏まえ、ポルトガル語を対象言語として展開することを試みる。まず、一般言語学やスペイン語学、ポルトガル語学における直説法未来と直説法過去未来の法性的解釈に関する議論をレビューし、次に、意味論や認知文法の観点から用例を分析して、両形式が持つ表現の非直説法性 (Irrealis) を指摘する。これに踏まえ、両形式の非直説法性に着目して提唱された推定法にスポットを当てる。単なる形態素のラベル付けの問題にとどまらないよう、意味論や認知文法における後発の法性研究と照らし合わせながら推定法の意義を主張し、同時に、その理論上の課題や限界についても明らかにしていく予定である。加えて、非直説法性及び推定法の形態素習得研究への応用の可能性も模索していきたい。

【自由テーマ ⑤】「ポルトガル語の直説法完全過去とその本質的機能について」

牧野 真也

叙述内容を発話時の前に位置付けるのが過去時制であるならば、ポルトガル語の完全過去は、それを含む節や文によって指示される事象が発話時の前に位置するのが一般的なので、その限りでは過去時制に見えよう。だがこの範疇には *Amanhã a estas horas, já ele partiu*. 「明日のこの時間には彼はもう出発してしまっている。」のような未来完了的用法もあり、この場合 *ele partiu* が指示する事象は発話時の後に位置することになる。また *Quando eu chego ele já saiu, quando ele chega eu já sai*. 「私が帰ると彼はもう外出しており、彼が帰ると私がもう外出しているのである。」のような例では *ele saiu* と *eu sai* が指示する事象は発話時の前後に跨る習慣・反復なので発話時の後にも位置しうる。いずれの用法も同範疇を冒頭の意味での過去と捉えると説明が難しいが、「その本質的機能は、発話時を含む時区間“非過去”に属する任意の“話者の時間的立位置”から“確認”される“事象終結”の表示であり、事象の終結から生じた状態が件の時間的立位置まで成立し続けているか否かを積極的に表示する働きはない」と解釈すれば、より一般的な過去の用法と併せて説明が可能かと思われる。

【自由テーマ ⑥】「付加語 Wh 要素 *por qué* と隣接性について」

石岡 精三

Zubizarreta(2001)では、主語倒置が適用されない用例(1a)は最小原理(Minimality)によって排除される。これは、Wh 要素がその Spec 位置へ移動することによって演算子として機能することになるゼロ範疇(wh/Q_i)による変項(e_i)の束縛が、その Spec 位置に主語が生成される演算子であるゼロ範疇(Cl_j)によって阻止されるためである。同じ論法は、wh/Q の先端部に生成される付加語 Wh 要素(*por qué*)の短距離移動用例である(1c-d)と長距離移動用例である(1e)をそれぞれ適格と不適格と予測する、しかしながら、(1d)と(1e)の判断が逆転する話者グループの存在が確認される。

(1) a. *Me pregunto qué Juan compró ‘I wonder what Juan bought’

b. *Me pregunto [qué_i [wh/Q_i [Juan_j [Cl_j [TP compró [e_j [V e_i]]]]]]]

|————— x —————| ↑

c. [^{ok/ok}]_i Por qué Juan quiere salir? ‘Why does Juan want to leave?’

d. [^{ok/*}]_i Por qué a Luis lo conoce Juan? ‘Why does Juan know Luis?’

e. [^{/*ok}]_i [Por qué]_j Juan ha dicho que María se fue *t_i*? ‘Why has Juan said that María has left?’

この判断の異同は、付加語 Wh 要素(*por qué*)と範疇(wh/Q)との隣接性(Adjacency)に関するパラメータで説明可能である。Clitic Left Dislocation(CLLD)の適用を受ける要素とゼロ範疇との隣接性に関するパラメータによって、以下の相違も説明可能となる。

(2) a. [^{ok/*}] A Irene a él se la presentaron ayer. ‘They introduced Irene to him yesterday.’

b. [^{ok/*}] A Juan MARÍA lo ha invitado, no Luisa. ‘It is María that has invited Juan, not Luisa.’

